

どうしてこんなことになったのかはわからない。同じ職場だった結婚目前の彼から一方的に振られたのが運の尽きだ。小さな会社だったので噂はあつという間に広がった。同情の視線に加え、私生活を会社へ持ち込むと言わんばかりの視線に居づらくなった。どんと構える根性や気力、会社への忠誠心だつてない。長年勤めていた会社はあっさり辞めた。

その日、ハローワークからの帰りに、途中で道を外れペットショップへ向かっていた。しかしペットショップだろうと思っていた店からは、ネオンの光が漏れており、猫や犬の姿はどこにも見当たらなかった。

足を踏み入れて初めて知ったのは、そこが観賞用の魚を販売する店ということだった。店内は静まり返っていた。部屋の壁一面に水槽が並べられており、色も大きさも違う見たことがない珍しい魚が思い思いに泳いでいた。軽快に動いているものもあれば、死んだようにじっとしているものもある。誰もいない様子なので二階へ上がってみると、ヤドカリやカニ類が水槽の中へ閉じ込められていた。ヤドカリは左手だけがやけに大きくぎこちなく歩いている。どれも硬い殻に包まれ、優しさとか温かみとは関係のない世界に生息しているように見えた。

「いらっしやいませ」

しばらくして店の奥から店主らしき男性が現れた。

「何かお探しですか？」

白髪混じりの短髪、日焼けした顔、白いTシャツから出た筋肉質の腕に、色のはっきりしたデニムがこの人を年齢よりも若く見せているようだ。誰に対しても愛想がいいのがわかる。きつとここにいるサカナたちからも慕われているんだろう、そんな気がする。

「えっと、魚を」

本当は猫とかハムスターとかそんな類を探していたはずなのに、店の雰囲気にもまれてサカナ、と答えてしまった自分に驚いた。男性は、わたしが何か購入する予定であることが分かると「今井です」と言つて名刺を差し出した。日焼けした手から海水の香りが漂っている。

「こちらは先日入ってきたばかりのオカヤドカリです。興味あるかな？ それとも魚が希望なら一階を案内しよう」

今井さんに誘導され、先ほど登ってきた階段をまた降りていく。上階から眺める一階は青いネオンのせいで海底のようだった。陸の甲殻類と地底の魚介類、そこには決して生活空間を共にする余地はないようだった。

「小さくて飼育が簡単な魚もたくさんいますよ。例えばこのクマノミとか、女性にはとても人

気です」

オレンジと黒の縞模様が入った魚を指差した今井さんが言った。

「他にもグッピーとか、小さな魚は同じ水槽で何種類も飼ってあげることができるから、慣れてきたら増やしていくといいよ」

「グッピーにクマノミは色彩豊かに躍動していた。彼らが意気揚々と泳ぎ回る様子は、疲れ切ったわたしにはスパイスが効きすぎるように感じた。

「これは何ですか？」

通路を挟んだ向かいの水槽で平たい何か砂の中へ潜るのが見えた。

「ああ、こちらはオスのシビレイです。珍しいものなんだけど、なかなか買手が見つからない。三年半ほどここにいるかな。体長二十センチのものは珍しくて、あまり店にも入ってこないんだ。買手がすぐについてもおかしくないんだけど、まだ見つからないのは僕が子離れできていないだけかもしれないね」

今井さんは少し笑った。

「この子でだいたい五歳、六歳だと思うんだけどね。海で生きているシビレイはこれ以上大きくなるとショップでは取り扱えないんだ」

シビレイの話になると今井さんは少し興奮しているように見えた。

「ちょっと待って。写真を取ってくる」

今井さんは先ほど降りてきた階段を上って行き、写真を数枚持って降りてきた。

「一応これがうちに来た時の写真だよ。ほとんど大きさは変わってないと思うね。砂と同色で見えにくいから、興味を持ってくれたお客様には写真で説明することにしてるんだ。自己アピールもヘタだしね」

写真はどれも薄暗いものばかりで、魚の顔が気の毒なほど平べったいのが気になった。粘土を丸めてから叩いて広げたようだ。

「そうなんですか」

わたしが水槽の方を見ていると、砂の上からのぞいている目と自分の目が合ったような気がした。

「あのね、こいつは体から出す電気を使って小魚を弱らせてから食べるんだ。腹の下に口がついているんだよ。実に愉快だ」

シビレイの腹の写真には確かに小さな穴が空いていた。

「デンキウナギと違って出す電気量もそれほど強くないから心配もいらぬし」
シビレイに関する説明を今井さんがしてくれている間、背中越しに時々視線を感じるような気がした。見られている、というのが正しいかもしれない。

「ところで何か魚を飼われた経験は？」

「いえ、何も」

「じゃあ水槽から揃えないとダメだな。魚のサイズで水槽の大きさが変わるよ。初心者は小魚から始める人が多いですよ。水槽もそれほど大きいものじゃなくていいしね」

今井さんは再び階段を駆け上がったいくと、今度は水槽用のパンフレットを何冊か持って戻ってきた。

「いくつか在庫もありましたよ」

パンフレットには可愛らしいものから本格的なものまで一通り紹介されている。

「せっかくなので他の魚も見てみますか？」

水槽に関するマニアックな説明がようやく終わった。

「そうですね」

答えてからも背中に感じる視線が気になった。

「やっぱり、あのシビレイをください」

緊張で声が上ずった。

「あの子を？ あの、熱帯魚の方が小さくて飼いやすいけど大丈夫？」

今井さんも驚いているようだった。でも、何となく嬉しそうな顔をしている。

「とりあえず、心配しなくても食費はそんなにからないから。一日に小魚一、二匹で、慣れたら冷凍のタコやイカを小指サイズに切って数切れあげればいいだけなんだ。本気なら詳しい飼い方もきちんと説明するよ」

わたしは砂とすっかり同色化してしまったこの恥ずかしがり屋のシビレイを購入するため契約書にサインをした。魚なんて小学生の頃に祭りですくった金魚を飼ったことがあるだけだ。それもあつげなく数日で死んでしまった。死んだ金魚を一匹放置して学校へ行ったら、帰ってきたときに残り全部が死体になって浮いていた。墓の場所は覚えているけれど、両親が離婚したときに家売ってしまったので今はどうなっているかわからない。

「まずは水槽なんですけど、九〇センチサイズと、ろ過装置が必要です。エイ自身は七万だけど六万円におまけするよ。つまり初期費用が結構かかりますが大丈夫ですか？」

「はい、必要なものを教えてください」

このようにしてわたしの退職金の一部は、旅行でもなく老後のためでもない、たった一匹の魚に捧げられた。水槽、ろ過装置、水槽の環境を整えるための材料など、全部合わせて二十万円ほど。今井さんは初心者わたしにこと細かくシビレイの育て方を説明してくれた。

「初めの一ヶ月は、シビレイにとって大切な家づくりに専念すること。まずは説明書に従って海水を作ってください。ポンプを使って水槽内の海水を三週間から四週間かけて循環させることも忘れないで。水槽は郵送する？ 持って帰る？ 環境が整い次第、シビレイを送りますね」

結局待ちきれなくて、水槽はタクシーを使って持って帰ることになった。

祖母が亡くなった際に譲り受けたLDKのマンションは、新婚生活を送るつもりで改装していたので一人暮らしには大きい。しかし幅九〇センチ、高さ五〇センチもある水槽は、店内だと立派に見えたはずなのに、部屋へ持ち込むとかなり圧迫感があった。もちろん水槽を置けるような棚もない。仕方がないので床へ置くことにした。カウンターキッチンと、その手間に置いていた事務用の机との間に決めた。仕事をするため椅子に座ると机の向こう側に水槽が、その向こうにカウンターキッチンが見えるレイアウトになった。

魚が届いたのは水槽を整えてからちょうど一ヶ月が経った頃で、いつの間にか桜は散り始めていた。

「HI. IT IS NICE TO MEET YOU. あの時は僕を選んでくださりありがとうございます。うございました」

シビレイを箱から水槽へ移した時、耳障りがして底から水泡がいくつも立ち上がった。

「WHEN YOU COME TO THE SHOP. 何度もあなたのことをご覧致しましたが、別に媚を売ってるわけではありませんでした」

声のようなものがする方へ顔を向けた。

「SO, 一応売られている身分だったので、いいお客様がキられたら愛想よくするようにと、店長がおっしゃっていました。あの店には結構長いこといらっしやいましたから」

テレビの音源が入っていないか確認した後、水槽に顔を近づけるとシビレイがこちらを向いていた。そこには平たい顔をした気を使うほどブサイクな魚がいる。選択ミスにしては高額すぎる買い物だ。

「EXCUSE ME, 拝聴されてます？」

彼は、多分、雄、はわたしに向かって挨拶をしているようだった。呆然とする私にその音は容赦ない。

「えっと」

水槽の上から中を覗くと水の屈折で見えにくかった。横からガラス越しに覗くと平たい体の中央で、つぶらな瞳がゆっくり動くのが見えた。

「TOMYと呼ばれておりました」

「トミー？」

思わず魚から目をそらす。

「驚かないで、今井さんはいつも僕に優しくしてくださいました」

魚が水の中で体を左右に動かした。砂に体をすりつけているようにも見える。

「ちょっと、黙って」

自分の耳を何度か手で叩いてから、小指を耳の穴へ入れる。

「あなた様のお名前は？ 何と仰ったらいいのでしょうか」

魚は興奮しているようだ。体が揺れている。

「落ち着きない、ちよつとは黙れないの？」

耳掃除をしながら気づけば質問に半分は答えている。

「と言いますと？」

魚は相変わらず体を揺らしている。

「相手の気持ちを思いやるとか、相手の様子を窺うとかないわけ。私は混乱してるの」

反対側の耳掃除を始める。

「NAMEはとっても大切だって今井さんがおっしゃっていたです」

魚はとてもおしゃべりだった。

「美和だよ」

仕方なく声に出す。

「ミワ！ ミワ！ ミワ！」

この魚は待ってもくれないし、気持ちを汲み取ってもくれなさそうだった。

「ところで、どうして英語が話せるの？」

「今井さんにも同じ質問を拝聴されたことがあります。海ではこれが普通のこと」

トミーは何を問われているのか分からないとばかりに瞬きを繰り返した。

「ミワ。お腹空きました」

「ど、どうしよう」

今井さんからの教えを書いたメモを探す。その間も魚はしゃべり続けている。

「隣の水槽のチビのスジシマドジョウちゃんは、粉末のようなものを食していました。今井さんはカップのラーメンをよく食べていらっしやいましたね。僕は生きた小エビ、もしくはタコやイカが大好物」

「分かった、分かった、ちよつと待ってね」

冷蔵庫を開けて何か入っていないかを確認する。残り物のタコがあるのを見つけて包丁で切る。一切れほどを用意して水槽の上から投げ入れた。地べたに正座してタコが落ちていく様子を確認する。波が邪魔してよく分からない。今度は片耳と頬を床につけて水槽の横側から魚を見た。

「大きい」

魚が泡を吹いた。

「何て？」

「大きくて召し上がれないです」

水底に沈んだタコは捨てられたみたいに水槽の端へ追いやられている。

どうしようか悩んだ末、タコを救うべく水の中に手を入れた。思ったよりも冷たい。水槽の上からだと波で自分の腕が折れたみたいに見える。タコを掴むとき魚に手が触れた。一瞬、電流が流れる。

「ごめんです。本能のようです」

「大丈夫、痛くないし」

興味本位で背中を触ってみたくなる。微電流が手の平に伝わった。

「何だか気持ちいいと感じます。幸福な気持ちになりますです」

魚が声を出した。

「うん、そうだね」

感じたことのない感触だ。水槽の中に入れた手がこのまま水の中にいたいと言う。

「この半分くらいが大きさがいいのかな」

私は急いでタコを掴んだ手を抜いた。

「食事は朝と夜です。あと、僕は夜行性でいらっしやるので就寝させていただきます。GOOD NIGHT」

食事を終えると魚はすぐに眠たくなったようだ。私には夢のようだがまだ朝は早い。もしかすると明日はもうただの魚なのかもしれないけれど、よく考えれば誰かと会話をしたこと自体が久しぶりのような気がした。

キッチンと仕事机の間に水槽を置いたものだから、部屋に一日籠っていると水槽が境界線になって、仕事と食のエリアに分かれる生活が板についてきた。ハローワークからの支給が終わり、何もしない生活が終止符を打ったのを機にオンライン上でイラストレーターの仕事に登録をしている。仕事に疲れば水槽を超えてフードコートであるキッチンへ行き小さなカウンターで食事を済ませ、時間が迫ればまた水槽を超えてワーキングスペースへ戻る生活。給料はよくないが無駄使いしなければまずいことにはならない。しばらくはこれでいいと思っている。努力して会社に貢献したって何にもならないような気がした。自分のために働くにしてもやっぱり無理しないのが一番だと判断した。友人のSNSも体に悪いと知ってからはシャットアウトしている。

#仕事終わり 行きつけ #同期 大好き #一周年 旦那さん ありがとう #トラベル
パリ 買い物 #女の子のママ

興味はあるが心に暴力を受けているような気になった。一人の世界は憂鬱ながらも安全地帯だった。ただ、何もすることがない時にふと、このままでいいんだろうか、と不安になることはある。外に出なくちゃ、でも思うように体が動かなかった。社会に復帰しなくちゃ、でもダメだった。

#仕事 忘年会 #ハイアットリージェンシー ランチ

みたいな少しでも頑張ろうとしていたかもしれない自分は遠い過去になっている。一日中、部屋に閉じこもり、誰とも共有することができないアウェイな場所で呼吸を繰り返していた。

魚はよく喋った。嬉しいようなうるさいような。時々彼のイラストを描いて見せてやると喜んでように体を左右に振った。お腹が空いて機嫌が悪くなるとガラスに体を何度も打ち付けて自己主張することもある。ちよつと面白いことがあるとよく泡を出す。笑っているんだろうか。夜中ずつと起きているらしいけど、何をしているのかはわからない。一度、長年いたショップの今井さんに会いたくなったりするか、と聞いたことがあるが「今の方が楽しい」と答えたトミーに、思わず抱きしめたくなるような感覚に陥って自分を制御した。

「ミワはこの家がスキなの？」

一日中机に座っている私に向かってトミーが尋ねた。

「どしてそんなこと聞くの？」

「友達も彼氏もいなさそうです。一人ですつと家にいらっしやる。それでもつて宅配の人のお伺い回数がやたら多いんだ」

トミーが片目を瞑ってこちらを向いた。

「収入がないようなら僕を召し上げるかもしれないし、売却を検討されるかもしれない。もしくは川に流されても困るわけで、僕は海水魚だし」

トミーはわざとらしく体を震わせてみせた。

「結婚目の彼氏に振られて人間不信ではあるけど、トミーは魚だから身の安全は保障する」
休憩を兼ねて水槽の隣で横になった。ヨガマットがベットがわりになっている。

「人間っていうのは時々ベリーバッドな奴がいらっしやるんだな。ミワは運も悪いんだね」
腹が立ったので背を向けた。ただいつの間にか失恋の痛みは消えている。一方で社会へ復帰できている不安は日を増すごとに膨らんでいた。

「ミワ、僕の背中を撫でてくれないかな」

申し訳なかったような、甘えたような声が背中の方から聞こえて来る。

私は体を起こすと袖をまくって恐る恐る水の中に手を入れた。トミーの背中に届く頃には肘までしっかり水に浸かってしまう。

「あっ」

優しい電流が手を痺れさせる。手の平から腕にかけて快感のようなものがせり上がってくる。

「幸せのおすそ分けだよ。サムウェアー オーバー ザ レインボー……」

嬉しそうに歌を歌い出したトミーを見て、思わず笑いがこみ上げた。

トミーと体を合わせる行為はいつのまにか習慣化していった。始めは手の平をトミーの背中

にのせるだけだったけれど、恐る恐る、お互いやり方や力加減がわからず、苦勞しながら最近ようやく、足にも電流を感じられるようになった。

水槽の前へ運んだ椅子に座り、水の中に膝下まで足を浸す。足の甲の上にトミーの体を乗せると電流が勢いよく流れた。光が苦手なトミーのために部屋の電気は豆電球に設定しておく。

「待って、ちょっと待って」

痺れに慌てて声を出す。

「ノンノン、ミワ。もうちょっとだけ」

トミーが先ほどよりもっと強い電気を流した。

次第にふくらはぎ、太もも、お腹のあたりにまで徐々にせり上がってくる電流の刺激にわたしは思わず声を上げる。快感がどこまでも、いつまでもついてまわる。

「ユー FEEL GOOD?」

トミーが囁く。

「ベリーマツチ」

気づけばテーブルの上で携帯が鳴っているけれど、ここから立ち上がることは決してできない。

この刺激は他の何ものにも埋められるはずはない。ほぼ夜行性のトミーとはすれ違いながらもただ一つの体の接点が二人を強く結びつけている。わたしはトミーを想っている、深く誠実にたぶんトミーも同じだ。

暫くしてトミーの電力が弱まってくるのに気がついた。疲れたのだろう、そっと水から足を抜くと、わたしは椅子から投げ出したままの足をゆすり、まだ感じる事ができる快樂を楽しんだ。

「今から飯行こうぜ」

もう一度携帯がしつこく震えるので手に取ると誠からだった。他にも着信があるようだったけれど、あえて確認しなかった。携帯は引きこもってからはほとんど使用していない。

「急に誘うのやめてよ。今日はもうわたしにとっての一日は終わったから」

せっかくの二人の時間を台無しにされて一気に気分が下降していく。どうでもいい誘いのために、家と外界との切り替えは簡単にできない。

「いい加減、家から出てこいよ」

誠が電話口でわたしにダメ出しをしているのがわかる。

「今日はもうご飯食べたから」

「相変わらず早いな、次は絶対来いよ」

「はいはい」

電話を切ってテーブルに置く。置く時に力が入って大きな音がした。

「誰?」

「大学からの腐れ男友達」

半ば不機嫌な声になる。

「名前がないと始まらない」

トミーが喚くので誠だと教えてやった。

「ミワは今の誘いになるべきだったと思うよ。誠さんはかなり優しい男のようだし、ミワのこと嫌いじゃない。すみませんですって謝罪した方がいい」

どこまでの会話を聞いていたのか、トミーが口を挟んだ。

「別にいいよ。いつでも話せるんだし」

ぶつきらぼうに言うのとトミーがすごい目でわたしを見ているのが分かった。

誠は大学のサークル仲間だった。眼鏡をかけていつも猫背で雰囲気暗い。饒舌になる時と黙り込む時の差が激しくて、何を考えているのか分からない。背が高過ぎるのを気にしていつも下を向いて歩いているような男だ。でも、ふと最後に会った時のことを思い出して、自分の中の陰湿な彼を修正する。今はもう少し男らしいかもしれない。まず、下を向いては歩いていない。数年前、下を向いて歩いていたところ、自転車と衝突してしまったのを機にトラウマになったらしい。顔をほんのちよつと上げるだけで陰気臭さが抜けた。とにかく、気の知れた相手にはそれなりに話をするのに、初対面の人には人見知り。だから打ち解けるのに大学生活のほぼ四年を使った。卒業後に、ようやくお互いが分かってくると、それぞれの恋人や仕事の相談ができる間柄になっていった。誠は彼女がいる時は、わたしなどこの世にいないかのように全く連絡をよこさない。そのくせ彼女に振られるとしょっちゅう飲みに連れ出された。わたしは彼氏がいようがいまいが関係なく誘われれば飲みに行く。そんな関係がこの二、三年年続いていた。毎月顔をあわせることもあれば、半年以上会わないこともある。要するにいつだって会えるのに、会わない時もあるし、会うときもある。それは毎回、誠の自分勝手な気分次第だった。

だけどこの半年、今度はわたしが一方的に断っている。誰にも会いたくないと思っているからだ。

夏が近くなってくると季節に反して冷えてくしゃみばかりするようになった。暑いと文句を言つて汗をかいていた昨年の夏が懐かしかった。

「水槽用のクーラーはどうしますか？ 今は春なので必要ありませんが、夏には水温が上がらないよう一定に保つてあげる必要があるんだ。この子は非常に暑さに弱い。クーラーを購入しない場合は、部屋の冷房を付けっ放しにして一定の温度を保つというのでもオツケーですよ」

今井さんのアドバイスもあり、節約のつもりで水槽用のクーラーを買わなかったわけだが、月末にくる電気代のことを考えると怖くなったりもする。寒さに加え、将来への不安も重なり、お

かげで最近はずっと普通の眠りにつくことが随分と難しくなった。眠らなくなると明日はまたやってくるというのに、一人で長い夜を過ごすのは考えつかないほどの怯えをもたらした。目を閉じているのにどこからか光が差し込んでくるような気がして、いつまでたっても落ち着かない。今日も先ほどから寝返りを打って、ずれるアイマスクを何度も目の上に置き直している。その度に意識が明瞭になっていく自分に、またか、という気持ちになって深いため息が出た。とうとう布団から這いずり出し、すぐにフードコートへ行って暖かいココアを入れた。トミーは機嫌よさそうにじっとしている。クーラーを確認すると十六度。メンズのニットカーディガンを羽織ってもまだ足りない。

「電気はつけないでね。僕は暗い方が好きだってミワはご存知です」

トミーが不機嫌な声を出した。

「眠れない」

わたしが鈍い声を出す。

「ほんつと、眠れない。なんだか眩しいの」

カーディガンを頭からかぶり、水槽側の隣の床に座り込んでトミーと向き合った。いずれ眠気がやってくるのを待つ。

「このまま眠れなかったらどうしよう」

「どうもならないよ、きつと明日は昼寝で一日が終わるのでしょ」

トミーが泡をたくさんはいた。笑っている証拠だ。

「仕事があるから無理、食いつぶされるじゃん」

自分が声を出すたびに覚醒しつつあることにさらなる不安が重なる。

「やれやれ、どうせ大した仕事でいらつしやらない。ウエディング関係のイラストを描いてるんだっけ？ シツレン中の人によって」

投げやりな言い方をしたトミーに腹が立った。

「うるさい、失敗できない大事な仕事だってあるんだから」

わたしは自分が今請け負っているどうしようもない仕事と、それからまともな仕事の割合を無意識に頭の中でカウントする。

「イラスト単価だって安いとお伺いします。おまけに不安定な仕事。家に引きこもっているにはそろそろ限界かもしれません。誰かのところへ伺って仕事くださいっておっしゃった方がいいかもしれない」

触れられたくない核心を突かれて一瞬だけ怯む。

「だから、これでも一所懸命やってる」

意地みたいなものが底の方から湧いてくる。

「じゃあ、一生このまま部屋から一歩も出ずに仕事するつもりなの？ OH, MY GOD」

トミーも止める気がなさそうだ。思わぬ方向へ話を持っていかれてしまっている。

「ヘンリーダーガーさん」

おかしなことを言い出し始めたトミーにお手上げしたくなる。

「だったらヘンリーダーガーさんみたいになればいい」

「もう一度トミーが声を上げる。」

「だから何よそれ」

「そいつは十九の時から六〇年間、部屋にひき籠ってイラストと物語を書き続けらっしゃった。極度の引きこもりだよ。それで『非現実の王国』って言う七人の少女戦士のおとぎ話を描いた。クリスマスに子供たち全員が惨殺される恐ろしい、しかも苦しくなるほど長いお話。長すぎて出版できないんだ」

「それはなんか、すごいね」

時々なんでこんな余計な事実をトミーは知っているんだろうと思うことがある。

「そう、ある意味すごいよ。世には出てこないアウトサイダーアートを生み出されたんだから。んで、そいつが申すんだ。『私は多くの子供と違い、いずれ大人になる日のことを考えるのが嫌でたまらなかったんだ。大人になりたくなかった。いつまでも子供のままがよかった。今や私は歳をとり足の不自由な老人だ。なんてことだ！』ミワだっておばあちゃんになるんだろ、人間はみんなそう。例外なんてないさ。誰も何も止められない。うまく時間に乗っかるんだ」

トミーは一気に言ってしまうと息を吐いた。吐き出した泡が水の中で上昇する。

「乗りたくなくても乗ってますから」

ムキになって言い返す。

「ノー、ノー、自分で操縦するのさ。例えばこいつは自分だけの王国を作られた。引きこもりのプロさ。YOU SEE?」

トミーが体を大きく動かす。水槽の中で砂が立ちあがった。

「つまりわたしは中途半端。自分を持っていない上に、仕事も大したことない。そう言いたいわけね」

徐々に苛立ちで声が大きくなっているのが分かる。

「BUT, ミワは本当は明るくて優しい女の子なんだろ?」

トミーがわざと目を合わせようとしてくる。

「そうかな、でも一生誰とも関わらず生きていくことなんてできるのかな」
痛いところを突かれて反撃する力が無くなっている。

「さあね」

色々と指図しておきながら、急に興味を失ったようにトミーがそっぽを向いた。

「わたしはただのモグラなの。地上へ出すぎると死んでしまう」

「全く、モグラだって次の瞬間を生き伸びるために餌を探して食べ続ける必要があるんだ。もちろん休みなし、休んだら腹ペコで召されてしまう。ミワがモグラならとくに餓死してらっしゃるよ」

人をバカにするような泡の音が水底から聞こえた。

「僕と出会う前は一応サラリーマンとかいうやつだったんだろ？」

「ストレスとか、失恋とか、人の死とか、原因なんていくらでもある」

思い出すのも嫌だった。

「メールでもご覧に入れたら？」

しばらくしてトミーが口を開いた。

「世の中の情報に左右されるのはごめんなの」

私が答える。

「FUCK OFF オンラインで仕事を受けてるくせに携帯に左右されたくないだって。そーゆー時代なの存じ上げておくせに。そこからは逃れようとしてもダメダメ」

トミーがため息をついたみたいに、口から出したらしい泡がいくつも体の下から出てきた。

「携帯の中に何かヒントが見つかるかもしれないじゃないか」

また始まったやり取りを今度もトミーはやめる気がなさそうだ。

「でも今ある仕事でもなんとかやっていけそうなの。確かにもっといい仕事は他にあるんだろうけどさ」

自分なりの言い分があるはずなのに、今はただの言い訳にしか聞こえない。

「バカバカ、ミワのバカ」

先ほどからトミーが体を動かすので、砂ぼこりで水の中が見えにくくなっている。

「僕は飢え死にしたくないんだ。ちゃんと一日二度のフードを召し上がりたいんだ。たまには水換えもしてもらいたいし、なんならこの水槽に友達だって欲しい。そのためにもたくさんのお金がいるよ。LOT・S OF MONEY」

トミーは体を左右に振って尻尾をガラスに何度も打ち付けた。

「うるさい、ほっといてよ」

わたしは床から立ち上がって足を踏みつける。

「もう、ほんとううるさい、トミーに色々言われる筋合いはない」

呼吸が荒くなった。

ただ、急に怖くなったこともあり、トミーに隠れて放りっぱなしにしていた携帯のメールをチェックすることにした。

「福田さん、久しぶり。デザインのお願ひしたいんだけどいいかしら」

前職の上司だった。

「電話に出るかメールして！」

友人からの着信とメッセージ。

「福田さん、こちらはてんでこ舞いです。デザインお願いしたく。お返事ください」
後輩からだった。

足の力が抜けていくのが分かった。チャンスの神様は前髪しかない、通り過ぎたらどう頑張っても掴めない。半ば震える手で携帯を握っていると誠から着信が入った。取るつもりじゃないのに手が触れて通話になってしまった。

「おう、こんな遅い時間にまだ起きてたのか」

自分から電話をしておいて誠は少し驚いているようだった。

「こっちのセリフ。もう寝るから切るね」

「おい、待て。ずっと何してたんだよ、とりあえず安心したけど」

電話の向こうで誠が息を吐いたのが聞こえた。

目の前が現実味を帯び始める。先ほどまで存在しなかったはずの何かがこの生活を浸食し始めようとしている。

「何にもないよ」

人と話をするのは随分久しぶりだった。生身の人間の声を聞くと不思議と安心した気持ちになった。

目が覚めたら朝方で、誠からメールが届いていた。

「明日の夜、と言っても今日だけど、駅前の居酒屋に十九時集合」

外界の気候や様子が分からず、服装に迷っているうちに時間に遅れそうだ。結局ユニクロの無地のワンピースを頭から被りスニーカーを履いて飛び出した。誠は居酒屋で先に飲んで待っていた。以前ならタバコを吸っていたような気がするが、禁煙席に座っている。

「半年ぶりだな」

誠は何も変わっていないように見えた。

「結構久しぶりなんだね」

気の抜けたような声になった。

「タバコは吸ってないの？」

「おう、辞めたよ」

この半年間の記憶があまり残っていないかった。彼はわたしへの気遣いと、ささやかな配慮で根掘り葉掘り聞くようなことはしなかった。その代わり近況を報告してくれた。

「新しい事業がうまくいきそうなんだ」

しばらく連絡を取らなかつたり、取つたりしているうちに時間は経ち、二年ほど前に立ち上げ

たITに関わる会社が軌道に乗り始めているらしかった。

「WEBの制作会社を経営している知り合いがいるから今度、美和のこと紹介してやるよ。デザイナーを探してた」

誠が言った。口数の少ない私の話を拾い取った誠が思いがけない提案をした。

「出来るかな、わからないな」

「とりあえずやってみないと分からないだろ。色々手伝ってあげられると思うよ」

ダサくて冴えなかったみにくいあひるの子が、目の前で白鳥の羽をはためかせている音が聞こえてくるようだった。

彼はうまく時間に乗れたのだろうか、知らない間に大人の男性になっていた。それとも見えていなかったただけなのかもしれない。バカにしたのかも、猫背野郎って。もう覚えていない。頼もしいけどなんだか寂しい、かもしれない。

「そろそろ帰るか？」

時計を見た誠が最後の一杯を飲みほしてから言った。

「久しぶりに会えてよかった」

「そういえば引越した。おばあちゃんの部屋を改装したの」

リップを塗り直しながらながら答える。

「ちゃんと心機一転できてるじゃないか。行かせてよ」

誠が顔を近づけてくる。

「学生の頃じゃあるまいし」

吐き捨てるような言い方になった。

「そうかな」

誠がお会計を済ませてくれた。

一人で家に帰り、ひんやりした部屋へ足を踏み入れた途端、かいた汗がすぐに吹き飛ぶ。息を大きく吸い込むと体が冷えて気持ち良かった。わたしの姿を見つけたトミーは体をばたつかせて口から泡を吐き出していた。

「ごめん、すぐ作る」

急いで靴を床に放り投げ、冷蔵庫まで一直線、親指サイズに切ったタコを二切れ、水槽の中へ投げ入れた。じれったいぐらいゆつくり水の中を死んだタコ足が沈んでいく。トミーは食べている間は不機嫌そうな目を向けて黙っていたのに、食べ終わると妙なくらい今日のことを聞きたがった。

「で、誠さんはどんな話をされたの？」

「特に何も無いよ。ご飯を食べて少し話しただけ」

無理やり話を聞きたがるトミーに、今日は人と話をして疲れたと嘘をついた。お風呂に入って

何かゆっくり考え事をしたい気持ちがあったのだ。

湯船に浸かって足を伸ばすと大きくあくびをした。右足を太ももに乗せると、足裏をマッサージしながら誠との会話をやんわり思い出した。昔からそうかもしれないけれど何を考えているのか分からなかった。

息を止めて湯船に潜った。顔を全部つけてしまうと体が痛くて、水の中はただ息苦しい。酸素の供給がなされない特異な空間はわたしを萎縮させた。目をつむると世界は黒になり何もなくなった。ふとトミーのことを考えた。水の中は本当にこんな感じなんだろうか。孤独と、静寂、外からの眺めと中からの眺めは一八〇度違う。

残りの酸素を一気に口から吐き出すと泡が出て湯船が大きな音を立てた。急いで顔を出して呼吸を整える。

誠に外へ連れ出されてからは社会的な拘束や時間がどこからともなく、こり固まったわたしの生活に流れ込み始めた。初めは抵抗があったものの、誠が無理やり扉をこじ開けるので、放っておいたら簡単に二つの世界を行き来することができるようになった。

いつもはこれまで通り家の中でトミーと二人、わたしは日中パソコンとにらめっこをしてフードコートとワーキングスペースを何度も往復する。家にはトミーのためにつけているクーラーが冷たく、最近はその辛くて外へ出ることもある。外の空気は蒸し暑く肌を優しく撫でる、その感じが懐かしかった。

誠はわたしの仕事に軌道に乗るよう取り計らってくれた。何人かの知人を紹介してくれ、その度にうまく立ち回ってイラストレーターという肩書きのわたしを売り込んでくれた。一人では到底できなかったことだ。仕事の後は食事をご馳走してくれることもある。その度、家に帰るのが遅くなってトミーの夕食も遅れるのだ。

「新しい仕事に、乾杯」

その日、仕事の一つ決まった。大手の会社でグルメを紹介するホームページのデザインを担当するのだ。誠が自分のことのように嬉しそうにする姿を見てトミーの喜ぶ顔を重ねた。先付けの枝豆が運ばれてきたところで、家にいるトミーの夕食を思い出した。

「ごめん、帰る」

慌てて席を立ち上がる。

「どうした？」

「家に帰らないと」

それだけでなくいつも一緒に夕食を食べていたトミーとわたしは、最近あまり食事を共にしていない。仕事と誠がトミーとわたしの時間を蝕んでいた。

「送って行くよ」

「一人で帰れるから大丈夫、ごめんね」

私について来ようとする誠を振り払い、急いで店を出た。

飲食店街から家まではそれほど遠くない。信号を二つ超えてコンビニを二軒通過、細い小道に入ったところにマンションがある。

「ただいま」

玄関の扉を開けてすぐにトミーの姿を水槽の中に見つけた時、彼に対し罪悪感を抱いていることに気がついた。

「おかえり、仕事順調そうだ。誠さんはミワのヒーロー。一番役に立つ友達と存じますです」

「ご飯だね」

靴を床に放り出し冷蔵庫を勢いで開ける。外食が続いたこともあり冷蔵庫の中にはたいしたものが入っていないかった。

「ミワ最近楽しそう、メイビー冷凍庫にイカが少しだけ残ってるんじゃないかな。そろそろ買物に伺ってよ、プリーズ」

トミーがご飯をもらう前の甘えた声を出す。

「誠がごはんに連れてくれたんだけど、食わずに帰ってきた」

冷凍庫からイカを取り出すと親指サイズに小さく切って皿に乗せた。

「WHAT? 僕は一日ぐらいいご飯なくてもノープロブレム」

トミーが体をこちらへ向けて驚いた顔をしているのが見えた。

「そんなことないでしょ」

「BOOOO」

トミーは息を吐き出すとぐったりした。多分本当にお腹が空いているのだろう、随分待たせてしまった。床に座ってイカを一つ、二つと水槽に入れてやると、勢いよく口の中に放り込んだ。

「ごめんね」

なんだか申し訳なくともう一度言う。

「僕はハッピーなんだ。ミワが楽しそうで、仕事もいい感じ。今までの陰鬱なモグラとはちよつと違う。オレンジ色がご覧できるんです。ほんの少し」

トミーが言った。

「オレンジ色が見える?」

水槽の横からトミーを見る。

「そう、ブルーがオレンジに変わっていくのが分かるんだ」

トミーはわたしの目を見てそれからっこり笑った。それなのに笑った目が少し寂しそうに見えた気もする。

「今日はあれやる？」

トミーが聞く。

「今日は疲れたからいいや。レトルトのチャーハンでも炒めてお風呂に入ろうかな」
あくびしながら体を伸ばす。人と会うと普段の二倍は疲れるようだった。

「ミワ、背中撫でてくれる？」

わたしがトミーの背中を撫でると軽く電流が走った。薄い皮膚を通じて鼓動の音を感じ取ることが出来る。トミーが黙ると部屋の中が静かになった。

「ミワ、一所懸命頑張りなさい」

しばらくしてトミーが言った。

「飯行くか」

誠から連絡があったのは三日後の夕方だった。週に二回も会うのは気が引けたが、以前のめんどくささはいつの間にか消えて無くなっている。

「いまスーパーで買い出し中」

手に取ったイカのサイズ、値段、賞味期限を見比べる。

「どこのスーパーだ？」

誠は電話を切る気がなさそうだ。

「近所のスーパー」

「わかった、じゃあ家向かうよ。コンビニ2つ目の先だろ」

誠の勝手さは健在だ。

食料のまとめ買いに思いがけず時間がかかってしまった。マンションの前まで戻ってきて、スーツを来た誠が外で手を振っているのを見かけ、あー逃げられないんだと思う。

「お疲れ、仕事が早く終わったからさ」

「とにかくこれを冷凍庫に入れなきゃ、それから食べに行こう」

我ながらいい案だと思った。それなら彼を部屋に入れずに済み、トミーの食事も問題ない。

「ここで待ってて、すぐに戻ってくる」

玄関の前まで来ると、誠を外で待たせて用事を済ませようと思った。家の中はひんやりして汗が気持ちよく引いていく。

「エビとイカ買って来てあげたよ。どっち食べたい？」

大急ぎで冷凍庫に買ってきた品物を入れる。

「以外と広いんだな、すっかり寒いな、何だよこれ」

扉の方から声が聞こえ、イカをかなり大きく切り落としてしまった。

「なに？　なんで入って来てるの？」

「BOOOO」

トミーが水の中で体を大きくゆらし、砂ぼこりが立った。瞬きをして何かを伝えようとしているように見える。でもわからない。無意識のうちに、床に置いた水槽が誠から見えているかどうか考えた。

「とにかく、一旦外へ」

包丁をまな板に戻し、誠がこれ以上部屋に足を踏み入れないように背中を押す。

「なんだよ、見られたくないものでもあるとか」

勝手に部屋にのり込み、のんきに笑っている誠に苛立ちを覚える。わたしとトミーだけの世界に亀裂が入る。ここは他の誰も来てはいけないのだ。それなのに彼を扉の向こうへ押し戻しながら、もう一人の自分が「別にいいじゃないか。家に入れるくらい」と言った。誠の背中を押す自分の手が方向感覚を失った。

「片付けたら部屋入れて」

急に誠が振り返ったので目と目があった。

「外で10分待つとくから」

誠はそう言って玄関の外へ出る。

「15分」

扉へ向かって叫んでから時計を確認する。大急ぎで部屋の中を整理しなければ。まずは体が冷えないうちにニットのセーターを頭から被り、その上にニットのカーディガンを羽織って、切りたてのイカとエビを立ったまま乱雑に水槽に向かって投げ入れた。

「どうした、どうした、そんな荒い入れ方しないで、波が立つから」

トミーが声をあげた。

「ごめん、とりあえず掃除」

いつもは静まり返っている部屋の中が、改めて眺めるとすぐく乱れているように見えた。

溜まった洗濯物や脱ぎ捨ててあった着替えは、隣の寝室へ突っ込んで扉を閉めた。机の上のパソコンや紙くず、本なんかを順序なく、しかし丁寧に縦に積み上げて、目に見えるほこりやゴミは適当に手で払って見た目だけを整える。

「ミワ、ALL RIGHT. 誠さんがいらっしやる、誠さんがいらっしやる」

トミーがどさくさに紛れて騒ぎ始めた。

整理するのにそれほど時間はかからなかった。床に放り出していたゴミや荷物がなくなると、キッチンと机の間の床に置いているトミーの水槽がやけに目立った。この状態だと誠は間違いない。この水槽に言及するだろう。そしてわたしがシビレイと同居していることを知るだろう。

トミーは家族で、恋人で夫だ。時計を見るとすでに5分が経っていた。私が玄関と水槽を交互に

見る間、トミーは黙ってわたしの方を見ていた。自分の運命を見定めようとしているみたいだ。

「何か言ってる？」

トミーに向かって念じる。わたしは誠を友達としてしか見ていないはずだ。今も昔も変わらな
い。変わってしまったのはもしかすると誠の方かもしれない。トミーは恋人だった。それな
のに何かが歪み始めている。

「ミワ、自分の気持ちに正直になつて」

しばらくしてトミーが言った。

「トミー、ちよつとの間、隠れてくれる？」

よく考えたつもりのお答えかもしれないけど、確信は持っていない。

まずは水槽の水を半分バケツへ移してから、その中にトミーを入れた。バケツの中に収まった
トミーはかなり窮屈そうだった。次に、重くて持ち上がらないので水槽とろ過装置をキッチン
奥へずるずると引つ張っていく。最後にバケツは浴室に隠すことに決めた。

「ミワ、僕は大丈夫だよ、ここは正念場でいらつしやる」

「分かっている。すぐに迎えにくる、そんなに遅くはならないから。わたしを許してくれる？」

「そーゆー問題じゃない。人間は人間と生きる生き物だから」

冷えを逃がすために風呂場の扉も開けていたので、幸いにも浴室は涼しかった。

「しばらくは我慢できそう？」

「ALL RIGHT. でもあんまり長くいると閉所恐怖症で死んじやいそう」

「美和、入るぞ」

玄関から誠が呼んでいる。

「急いで、グットラック」

トミーが狭いバケツの底から片目を瞑った。

「オツケー」

風呂場を後にするとすでに誠が部屋の中央に立っていた。

「ちよつと勝手に入らないでよ。準備つてものがあるの」

自分の家の中に大人の男性がいるのは違和感があった。それなりに高かったはずの天井が低
く見えたし、何もなかった場所に床から突然木が生えて、一瞬で育ってしまったみたいに見えた。

「よかったら座って」

いつも自分が座っている椅子を案内し、急いで温かいお茶を用意する。

「涼しすぎるな」

誠は家に入ってからずっと腕をさすっている。

隣に座って2人でお茶を飲んでいる間、時々用事をするふりをして浴室を覗きに行った。トミ

ーは早く戻れとわたしを何度も追い返す。

「やっぱりどう考えても寒いんだけど。その雪だるまみたいな格好だって、おかしいだろ」
誠の目がリモコンを探しているのが分かった。

「ごめん、実はクーラーが故障して、調節できないの。寒いなら帰っていいよ」

「寒い。そんなこと言わずに抱きしめるとかしてくれ」

誠が体を寄せてこようとす。

「ばっかじゃない。私を彼女代わりにするのはやめてよね」

余っていたフリースと毛布を誠の膝に投げる。

「大学の時さ、美和の下宿先で、みんなで鍋パーティーやったことあったよな」

すっかりくつろいだ雰囲気になって、いつの間にか誠が昔話を始めていた。

「合宿のビンゴでカニが当たったんだっけ。騒ぎすぎて大家さんに叱られたよね」

「酒の買いすぎだよな。美和も相当酔ってた」

それから共通の友人の話になったり、お互い無言でネットサーフィンをしているうちに結構時間が経ったように感じる。

「大変」

時計を確認するとやはり1時間以上が経っている。

「トミー」

慌てて浴槽に向かって走った。半開きにしていた扉を勢いよく開いて声をかける。トミーが疲れ切ったようにうなだれていた。

「トミー？」

返事がない。

「どうしよう、どうしよう、ごめんね」

小さなパニックが広がっていく。

「なんとかしないと」

バケツを外へ運ぼうとするも足がもつれて運べない。

「どした？」

騒ぎを聞きつけたのか誠が浴室に顔を出した。

「どうしたじゃない、とりあえずキッチンに水槽が置いてあるの。バケツの魚をそこへ移して。早く、一刻の猶予もない」

誠は中を確認して一瞬怯んだように見えたけれど、私の金切り声に慌ててバケツを持ち上げた。

「涼しくて広い場所に。とにかく水槽に入れてあげなきゃ」

誠がバケツを運んでくれる間も落ち着かない。

バケツからトミーを取り出すとき、久しぶりの電流を手の中に感じた。水槽へ無事戻ったトミ

―は体を左右に揺らしてわたしと誠を交互に見ている。

今度はキッチンの奥から水槽をリビングの真ん中まで一緒に運び、ろ過装置の電源をオンにした。

「何て言った？」

水槽の中のトミーに声をかける。

「ん？ 何も言っていないよ」

誠がわたしを見る。

「トミー？」

もう一度トミーに向かって声をかける。

「この魚、トミーって言うのか？」

誠の声が邪魔をする。その間もトミーが口から泡を出して体を左右に揺らしている。なんと云ったのだろうか。

「トミー、何か言いたいことあるんでしょ？」

できるだけ大きく声をかける。

「とにかく、大丈夫そうでよかった」

誠が安堵したように言った。

トミーがまた口から泡を出して体を左右に揺らした。

「大丈夫かどうかなんて誠にはわからないじゃない」

大声が出た。トミーの様子に不安になる。

「誠はもういいから、私を一人にして」

溢れ出していたらしい涙が止まらなくなった。

思いついたままに誠の背中を押して玄関の方へ向かわせる。

「おい、落ち着けよ。魚、大丈夫なんだろう？」

誠は私を落ち着かせようと必死になっている。

「わかんないんだってば。今日は帰って」

自分でもどうすればいいのか分からない。構わず誠の背中を押し続けて玄関の方へ向かわせる。

「どうしたんだ、落ち着け」

誠が私を押し戻してくる。

「だから誠は関係ないんだってば。今日はもう帰って」

誠は思ったように進んでくれない。

「わかった、わかったよ。帰るよ。その代わり落ち着いたら連絡くれよな、いいよな」

私が返事をしないしているとまた何か話そうとするので扉を開けた。

「待ってるぞ」

誠の張り上げる声をよそに今度は思い切り扉を閉めた。

鍵をかけてすぐにトミーのところへ走って戻る。

「トミー、トミー」

声をかけ続ける。

「トミー？　お願い、言いたいこと言いなつて」

必死になって水槽を揺らすのにトミーは一向に答えてくれない。

「お願いだから、ねえ、なんか言つてよ」

トミーが口を開けると泡が水面に浮かび上がった。口をパクパクさせているトミーと目が合った。顔をくしゃくしゃにした私はトミーに向かって次の答えを求めている。どうしてだろう、

彼が何と言っているのか私には分からなくなっていた。